

創作分野における深い学びの実現に向けた学習指導の工夫 — こだわりをもつための【3つの問い】の活用を通して —

呉市立呉中央中学校 松野 志保

研究の要約

本研究は、創作分野における深い学びの実現に向けた学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、深い学びを実現するためには、各教科等の見方・考え方を働かせ、知識を相互に関連付けたり比較したりしながら、場面や状況に応じて選択したり組み合わせたりすることで、汎用的に活用していくことが重要であることが明らかになった。そこで、本研究では、「創作分野における深い学び」を、創意工夫の過程において、音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりして創作の様々な場面で活用していくこと」とした。創作分野における深い学びを実現するために、知識の関連付けや比較を促す、こだわりをもつための【3つの問い】を、音楽科における思考力、判断力、表現力等を育成する場面である創意工夫の過程に設定し研究授業を行った結果、中学校音楽科創作分野の学習指導において、創意工夫の過程にこだわりをもつための【3つの問い】を設定し活用することは、深い学びを実現するために有効であることが明らかになった。

I 主題設定の理由

中学校音楽科の創作分野では、創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、創作表現を創意工夫することが求められている⁽¹⁾。中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年、以下答申とする）では、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、思いや考えを基に創造したりすることが深い学びの実現に向けて重要であることが示されている⁽²⁾。また、田村学（2018）は、深い学びとは、知識が関連付いて構造化され高度化し、駆動する状態に向かうことであると述べている⁽³⁾。以上のことから、創作分野における深い学びの実現には、音楽的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けて構造化、高度化し、駆動する状態に向かわせる学習指導の工夫が必要であると考えられる。

本学園の生徒（第3学年）に実施した創作の活動に関わるアンケート結果を図1に示す。多くの生徒が音楽に対する感性を働かせている一方で、創作の活動を通して思いや意図を深めていると実感する生徒は少ないことが分かった。この結果から、これまでの自身の実践には、創作分野における深い学びの

実現の過程、つまり、音楽的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けて構造化、高度化し、駆動させる状態に向かわせる過程に課題があると考えた。

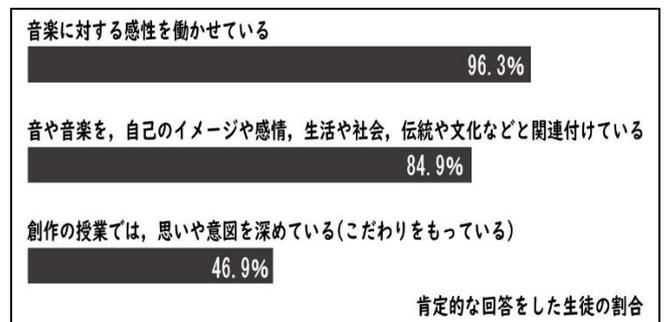


図1 創作の活動に関わるアンケート結果 (n=82)

植阪友理（2021）は、原理、原則、意味に当たる部分といったことを学習者自ら説明することができれば、深い学びになっていることが確かめられると述べている⁽⁴⁾。また、教師が深い学びを促す発問を行うことで、表面的で断片的な知識にとどまらない、つながりのある豊かな知識が構成でき、最終的に目指す学習に到達する可能性が高まると述べている⁽⁵⁾。本学園でも、問いが深い学びの実現に向けて重要であると捉え研究を進めているところである。創作分野において、音楽的な見方・考え方を働かせ

ながら、知識を相互に関連付けて構造化、高度化し、駆動する状態に向かわせるために、創作表現を創意工夫する過程に位置付ける問いを工夫することで、深い学びを実現することができると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 創作分野における深い学びについて

(1) 深い学びとは

答申では、深い学びとは、習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、思いや考えを基に創造したりすることに向かうことであると示されている⁽⁶⁾。また、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくためには、思考力、判断力、表現力を育成する場面への効果的なアプローチが有効であることが示されている⁽⁷⁾。

田村（2018）は、深い学びについて、習得・活用・探究を視野に入れた各教科等固有の学習過程（プロセス）の中で、それまでに身に付けていた知識や技能を存分に活用・発揮することで、知識が相互に関連付いて構造化され高度化し、駆動する状態に向かうことであると述べている⁽⁸⁾。また、田村（2018）は、知識が駆動している状態とは、構造化、高度化した知識が、適正な態度や汎用的な能力となって活用できている状態であると述べており⁽⁹⁾、「思考力・判断力・表現力等とは、そうした能力が特別に存在するのではなく、知識が相互につながり、場面や状況とつながり構造化し、より高度化した状態となり、駆動する状態になることだと考えることが重要なのである」¹⁾と述べている。田村（2018, 2021）の考える、思考力、判断力、表現力等における知識が場面とつながった状態を図2に示す⁽¹⁰⁾。

図2における、構造化した知識とは、個別の知識が相互に関連し合ったり、中心的な知識に個別の知識が関連付いたりしたものである。構造化した知識は、関連付ける、比較するなどの手続き的知識（思考スキル）⁽¹¹⁾を使いながら、選択したり組み合わせたりして高度化し、高度化した知識は、様々な場面でさらに選択したり組み合わせたりすることで、汎用的に活用・発揮できる知識となり、知識が駆動する状態になる。

答申及び図2を踏まえ、本研究における深い学び

とは、各教科等の見方・考え方を働かせることで構造化した知識を、関連付けたり比較したりしながら、選択したり組み合わせたりして高度化し、高度化した知識を、様々な場面でさらに選択したり組み合わせたりするなどして、汎用的に活用していくことだと考える。

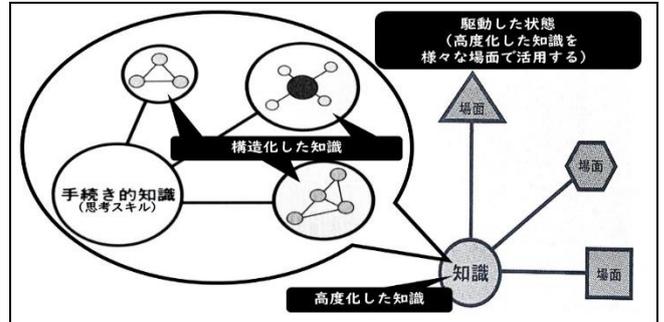


図2 思考力、判断力、表現力等における知識が場面とつながった状態（田村（2018, 2021）を参考に稿者作成）

(2) 創作分野における深い学びとは

創作分野において、思考力、判断力、表現力等を育成する場面とは、創作表現を創意工夫する過程である⁽¹²⁾。中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編（以下中学校解説とする）には、創作表現の創意工夫について、「音や音楽に対する自分のイメージを膨らませたり他者のイメージに共感したりして、音楽を形づくっている要素の働かせ方などを試行錯誤しながら、表したい創作表現について考え、どのように創作表現するかについて思いや意図をもつことである」²⁾と示されている。

中学校解説には、音楽科における知識について、「曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解すること」³⁾であると示されている。音楽科における知識には、曲名や、音符、休符、記号や用語の名称などだけでなく、音楽から知覚・感受したこと、自己のイメージや感情と音楽との関わりが含まれる。中学校解説には、創作分野における思いや意図は、創意工夫の過程において、知識・技能を生かしながら試行錯誤を重ねることでさらに深まったり新たなものになったりすると示されている⁽¹³⁾。

臼井学（令和元年）は、中学校音楽科における深い学びの実現のためには、生徒が音楽的な見方・考え方を働かせることのできるような学習過程を構想することが重要であり、音楽的な見方・考え方は、中学校音楽科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの

であると述べている⁽¹⁴⁾。音楽的な見方・考え方は、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などと関連付けること」⁴⁾である。

中学校解説及び臼井（令和元年）から、創作分野において深い学びを実現するためには、思考力、判断力、表現力等を育成する場面で、音楽的な見方・考え方を働かせる必要があることが分かる。そこで、創作分野で育成する思考力、判断力、表現力等における知識と創意工夫の場面がつながった状態の例について、図2を基に考えた内容を図3に示す。

図3における構造化した知識とは、知覚・感受したこと、自己のもつイメージ、思いや意図などが、それぞれで相互に関連付けて質が高まっているものである。高度化した知識とは、構造化した知識を手続き的知識（思考スキル）を使いながら、選択したり組み合わせたりしたものである。高度化した知識は、例えば音素材を決めるなどの場面でさらに選択したり組み合わせたりすることで、汎用的に活用できる状態になると考える。なお、音楽科において手続き的知識（思考スキル）を使うためには、音楽的な見方・考え方を働かせる必要がある。なぜなら、例えば知覚・感受したことと自己のもつイメージを

関連付けたり、思いや意図と知覚・感受したことを比較したりする場面では、常に音や音楽を聴きながら思考、判断するからである。音楽的な見方・考え方を働かせ、知識を構造化、高度化していくためには、手続き的知識（思考スキル）に働きかける問いが重要であると考えられる。

以上のことから、創作分野における深い学びとは、創意工夫の過程において、音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら、選択したり組み合わせたりして創作の活動の様々な場面で活用していくことだと考える。

2 こだわりをもつための【3つの問い】の活用について

(1) 深い学びを実現する問いとは

植阪友理（2021）は、原理、原則、意味に当たる部分といったことを学習者自ら説明することができれば、深い学びになっていることが確かめられると述べている⁽¹⁵⁾。また、教師が深い学びを促す発問を行えば、つながりのある豊かな知識が構成でき、最終的に目指す学習に到達する可能性が高まると述べている⁽¹⁶⁾。

田村（2018）は、深い学びを生み出す要因とし

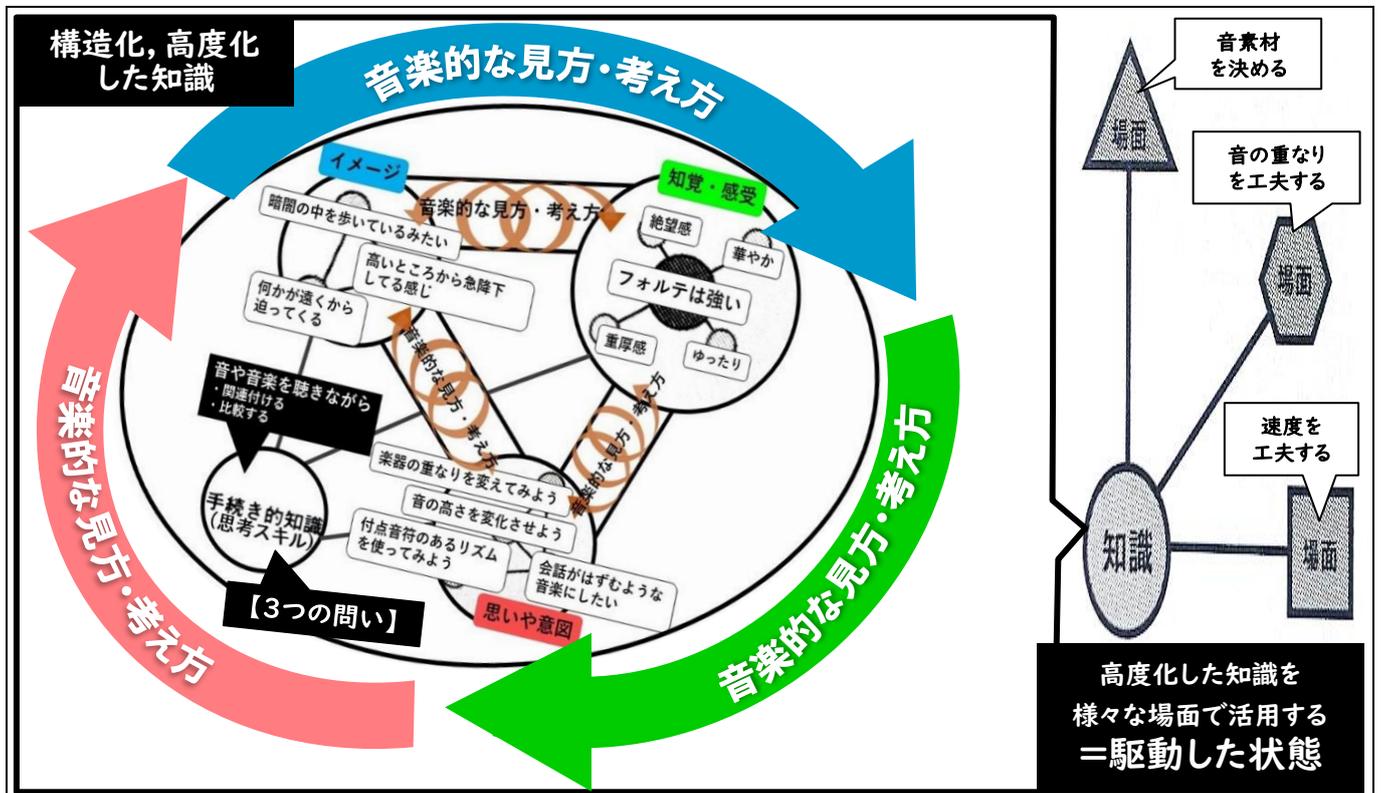


図3 創作分野で育成する思考力、判断力、表現力等における知識と創意工夫の場面がつながった状態の例

て、開かれた問いの重要性について述べている⁽¹⁷⁾。開かれた問いとは、子供が自らに問い続け、熟考し続けることができ、そうすることで、知識の構造化を促すことができる問いであると述べている⁽¹⁸⁾。

これらのことから、目指す学習に到達する、つまり深い学びを実現するためには、原理、原則、意味に当たる部分について考えたり説明したりすることを促す開かれた問いが必要である。創作分野においては、問いによって学習者が考えたり説明したりすることで手続き的知識（思考スキル）に働きかけることができると考える。問いによって音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚・感受したことやイメージ、思いや意図を選択したり組み合わせたりして様々な場面で活用できると考える。

(2) こだわりをもつとは

本研究では、思いや意図をもつことを「こだわりをもつ」と表現する。こだわりとは、細かな点にまで気を使って価値を追求することである⁽¹⁹⁾。

創作分野における思いとは、このような音楽をつくりたいという考えのことであり、意図とは、つくりたい音楽をどのように表現するかという考えのことであり⁽²⁰⁾。思いや意図は、創意工夫の過程において、さらに深まったり新たなものになったりする⁽²¹⁾。

思いや意図が深まったり新たなものになったりするとは、例えば、「楽しく元気な雰囲気を感じる旋律にするために、付点音符のあるリズムを使ってつくりたい」⁵⁾という思いや意図をもった生徒が、創意工夫の過程を通して、「付点音符のあるリズムを使っても、音の高さの変化が小さいと楽しく元気な雰囲気あまり感じられないので、音をつなげるとき、音の高さの変化が大きい部分も入れてつくりたい」⁶⁾というように創意工夫する視点をより詳細にしていくことである。この例のように、思いや意図を深めたり新たなものにしたりするためには、創意工夫の過程において、音楽的な見方・考え方を働かせ、実際に出した音や音楽と、自己の思いや意図との間に違和感を知覚したり感受したりする必要がある。この知覚・感受を基に創作表現を試行錯誤することで、思いや意図は深まったり新たなものになったりする。つまり、思いや意図を深めるとは、創意工夫の過程を繰り返すことで、自らの価値判断を伴った音楽表現にしていくことだと考えることができる。

創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたり

しながら、試行錯誤する創意工夫の過程を通して、思いや意図を深めたり新たなものにしたりすることは、創作表現にこだわりをもつことだと考える。

(3) こだわりをもつための【3つの問い】の活用について

創作分野における深い学びの実現に向けては、音楽的な見方・考え方を働かせ、知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら構造化、高度化して活用していくことが重要である。しかし、本学園の生徒は、図1のアンケート結果にもあるように、思いや意図をもつ過程に課題があり、知識の構造化、高度化が十分にできず、創作分野において知識が駆動しにくい状態にあると考えられる。

そこで、手続き的知識（思考スキル）に働きかける問いを設定することで、知識の構造化、高度化を促す。問いは、ICEモデルを参考に次のように設定した。以下【3つの問い】と表記する。

【Ideas】

①○○を表現するためにはどんな（音楽を形づくっている要素）が合うのだろう？

【Connections】

②（音楽を形づくっている要素）を変えると音楽はどうなるのだろう？

【Extensions】

③他にどんな工夫ができるのだろう？

①は音や音楽と思いや意図とを関連付ける場面で、②は音や音楽を関連付けたり比較したりする場面で、③はさらに知識を選択したり組み合わせたりする場面で活用することを想定して設定した。こだわりをもつための【3つの問い】は学習者が個別に、また協働的に活用する。

【3つの問い】を活用し、知識を構造化、高度化して活用していく生徒の学習過程の例を図4に示す。例えば、「夏」から「夏休み」「わくわくする」というというイメージをもった段階を「思0」としたとき、【3つの問い】を活用することで、生徒のもつイメージが知覚・感受したことや思いや意図と相互に関連付いて構造化、高度化していく様子を「思1」、「思2」、「思3」と示している。

思0 「夏」といえば、「夏休み」「わくわくする」イメージだな。

①「夏」を表現するためには、どんな（音色、速度、テクスチャ）が合うのだろう？

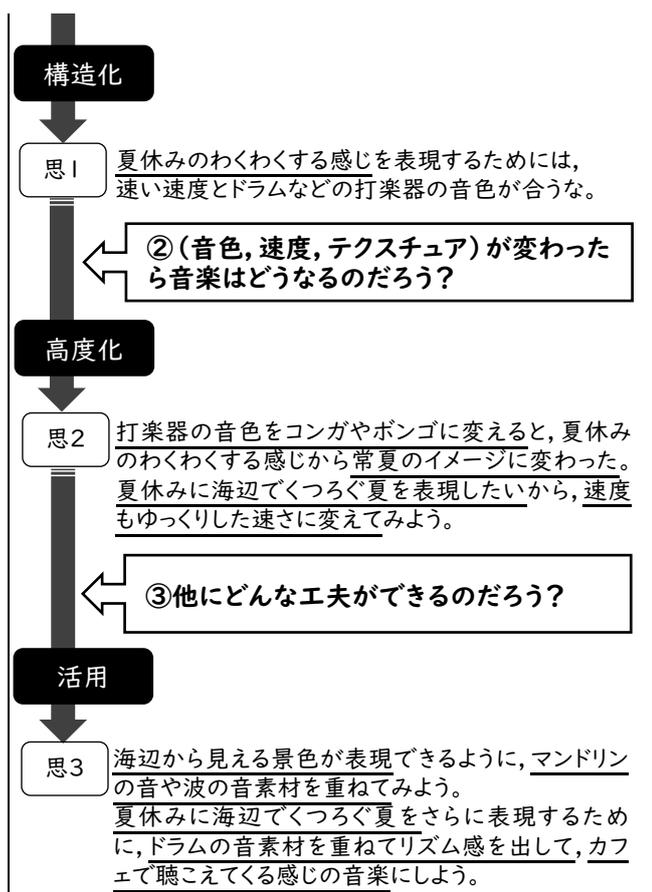


図4 【3つの問い】を活用することで知識が構造化、高度化していく生徒の学習過程の例

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

中学校音楽科の創作分野において、創意工夫の過程にこだわりをもつための【3つの問い】を位置付け活用すれば、知識の構造化、高度化を促し、深い学びの実現に向かうことができるであろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

	検証の視点	方法
1	【3つの問い】は、知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったか。	授業観察 振り返りシート 音楽作品
2	【3つの問い】は創意工夫の過程において生徒が活用できる問いであったか。	アンケート

Ⅳ 研究授業について

1 研究授業の概要について

研究授業の内容及び学習計画を表2に示す。

表2 研究授業の内容及び学習計画

期間	令和4年7月12日～令和4年7月15日	
対象	所属校第3学年（3学級99人）	
題材名	「夏」をイメージしてオリジナルの音楽を創作しよう	
目標	音素材の特徴及び音の重なり方などの構成上の特徴を表したいイメージと関わらせて理解するとともに、まとまりのある創作表現を創意工夫することで生まれる音楽の多様性に関心をもつ。	
要素	音色, 速度, テクスチャ	
時	学習内容	振り返りシートの記述内容
1	音素材を選んだり組み合わせたりしながら「夏」らしい音楽をつくろう ○音素材の組み合わせが生み出す曲想の豊かさに関心をもつ。 ★1(【3つの問い】活用場面) ○「音色」「速度」「テクスチャ」を変化させることによって曲想や自己のイメージが変化することに気付く。	音素材を選んだり組み合わせたりすることを通して、気付いたこと・考えたことはなんですか？
2	「夏」らしい音楽にするために友達と聴き比べたことを生かして工夫しよう ★2(【3つの問い】活用場面) ○固定の旋律と音素材の組み合わせや「音色」「速度」「テクスチャ」の変化による音楽の特質や雰囲気の変化を知覚・感受し、創作に生かす。 ○音楽の特徴と表したいイメージとの関わりについて考える。	友達の音楽を聴いた後、自分の音楽にどんな工夫をしましたか？
3	こだわりをもっともっと「夏」らしい音楽になるように工夫しよう ★3(【3つの問い】活用場面) ○さらに工夫を重ねることで音楽が変化し、イメージが広がることに興味をもち、その多様性を楽しむ。	①みんなの音楽を聴いて、どんなことを感じたり考えたりしましたか？ ②音楽づくりの面白さはなんだと思いますか？

2 使用するICT教材について

研究授業では、本学園の生徒が一人一台端末として用いているiPadに搭載されている音楽制作アプリGarageBandを教材として使用した。GarageBandには、豊富な音素材や速度等を変更する機能が備わっている。音素材を選んで組み合わせたり速度を変え

たりするなど、記譜の技能に関わらず創意工夫がしやすい教材である。また、創意工夫する過程で試したことを、すぐに再生し、音として確認するためにヘッドフォンを使用させることとした。

V 研究授業の分析と考察

1 【3つの問い】は、知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったか

(1) 生徒Aの授業観察を中心とした分析

生徒Aを中心とした授業の実際を図5に示す。生徒Aは、普段から音楽科の学習に意欲的に取り組む生徒である。

生徒Aは、第1時の★1(【3つの問い】活用場面、表3参照)において、「夏」のイメージに合う音素材としてドラムやコンガを選択したり、速度や音の重なりを変化させると音楽がどのようなかを試行錯誤したりしながら、自分なりのこだわりをもって創意工夫を重ねていた。しかし、第2時の★

2では、生徒Wの音楽と比較して聴いてみたり、生徒Xからアドバイスを受けてたりと、【3つの問い】を活用しながら協働的に取り組んでいた。第2時後に提出した生徒Aの作品は、生徒に条件として提示した固定の旋律を、切り取ったり逆再生したりするという工夫を行っており、試行錯誤を繰り返す様子がうかがえる。このように、【3つの問い】を活用して試行錯誤を繰り返すことで、生徒Aは思いや意図を深めたり新しいものにししたりしながら、新たに発想した「夏」のイメージを基にさらに創意工夫を重ね、第3時には、自分なりの自信とこだわりをもってつくった音楽を発表することができた。生徒Aの発表後、【3つの問い】③他にどんな工夫ができるのだろうか?と学級に問いかけると、速度や音色の工夫が提案された。この提案を受けて、生徒Aはさらに速度や音色について試行錯誤していたが、最終的には、音楽に強弱を付けて気持ちの変化を表現しようとするとともに、音の重なりを変化させる過程で新たに得た発想を生かし、第2時までにもっていたイメージとは異なる音素材を重ねて音楽を完成

教師からの【3つの問い】	生徒Aが自らに活用する【3つの問い】	協働の場面で活用する【3つの問い】	生徒Aの発言及び記述	他生徒の発言
第1時 個別で創作	第2時 個別・協働(グループ)で創作	第3時 協働(学級)・個別で創作		
①イメージした「夏」を表現するためには、どんな音色が合うのだろうか?	生徒A ②音色が変わったら音楽はどうなるのだろうか?	夏休みが始まることから、終わっていくところまでをイメージして音楽をつくりました。 ★夏休み直前のわくわくした気持ちをドラムやコンガ、タンバリン、ギターといった楽器でリズムが刻まれている音素材を重ねて表現しました。 ★宿題が終わっていない焦りを、最初よりももっと小刻みなリズムの音素材とシンセサイザーを重ねて表現しました。 ★全体的に速度は速くして、楽しさと焦りが伝わるように工夫しました。	生徒Aの発言及び記述	他生徒の発言
ドラムやコンガの音はわくわくした感じがする。	生徒W 旋律の音色を機械音みたいな音にすると音楽に合う。	③他にどんな工夫ができるのだろうか?		生徒Y わくわくする、楽しい感じを表現するなら、明るい音色にしてみたらどうだろうか?
②速度が変わったら音楽はどうなるのだろうか?	生徒X ②速度が変わったら音楽はどうなるのだろうか?	生徒Z 焦っている感じがあまり分からないから、速度をもっと速くしてみたらどうだろうか?		
速度を速くすると楽しさをより感じる。	生徒W もう少し速い方が「テンション高い夏!」って感じがする。	③他にどんな工夫ができるのだろうか?		
焦っている感じにも聴こえる。	③他にどんな工夫ができるのだろうか?	生徒A ③他にどんな工夫ができるのだろうか?		
「宿題が終わっていない!」「やばい!」って感じが表現される。	旋律を切り取って逆再生してみよう。	生徒X ③他にどんな工夫ができるのだろうか?		
②音の重なりが変わったら音楽はどうなるのだろうか?	中間部にシンセサイザーとパーカッションを重ねよう。			
音がたくさん重なった方が豪華な感じがして楽しさが表現できる。	生徒A ③他にどんな工夫ができるのだろうか?			
	生徒X イメージに合うようにもう少し音楽に変化を付けてみたらどうだろうか?			
				③他にどんな工夫ができるのだろうか? ②音の重なりが変わったら音楽はどうなるのだろうか? 焦っている感じがより伝わるように音素材の強弱を強くして目立たせた。リズムの刻みを細かくして、音色を歪ませたら、速度が速くなった感じが出た。最後の宿題に追われていて焦っている感じのところに、オーケストラとオペラの歌声みたいな音色を重ねると絶望感が増して、よりイメージが音楽で表現された。

図5 生徒Aを中心とした授業の実際

(波線：音色，太線：速度，波線：テクスチャ，その他の要素：点線，網掛け：生徒のイメージを表す)

させた。授業後の生徒Aの記述から、他者の意見を参考に試行錯誤する過程で、これまで試さなかった音素材を見つけたこと、また、その音素材から「夏が終わってしまう寂しさ」とは別に「宿題に追われる焦り」「絶望感」をイメージした音楽にすることができたと考えていることが分かった。

生徒Aの授業観察を中心とした分析から、生徒Aが【3つの問い】を活用することで、知覚・感受、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら構造化、高度化し、作品をつくるために思考・判断する場面で構造化、高度化した知識を活用している様子うかがえる。【3つの問い】は、生徒Aの知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったと言える。

(2) 生徒Bの音楽作品の変容を中心とした分析

生徒Bの音楽作品の変容を図6に示す。生徒Bは、学習活動には消極的で、音楽科の授業では発言することのない生徒である。

生徒Bは、第1時の当初、テーマ「夏」から「強い」というイメージをもっていた。★1の場面では、【3つの問い】①強さを表現するためにはどんな音色が合うのだろうか？を活用し、音素材を3つ選び、固定の旋律を重ねている(図6①)。生徒Bはこの音素材の重ね方について、振り返りシートに自分のイメージに合う音素材を手あたり次第に組み合わせたと記述している。生徒Bの音楽作品からも、固定の旋律の開始位置をずらしている(図6②)ものの、こだわりをもつことはなく作業的に音素材を重ねている様子うかがえる。また、音色には注目しながら音素材を選ぶことができている(図6①)が、速度やテクスチャを創意工夫することはしていない。

第2時★2では、前時に作品の後半に配置していた固定の旋律を、前半部分に配置している(図6③)。また、固定の旋律のみで構成している前半とは対照的に、後半に複数の短い音素材を付け加え、ずらしたり重ねたりする(図6④)など、曲想に変化が生まれていた。第3時★3では、前時では、ずらし方や重ね方を工夫していた部分(図6④)の、旋律の長さや音色の種類を調整し、テクスチャや強弱を変化させている(図6⑤)。また、第1時には「夏」の「強い」というイメージを表現するため、ドラムやシンセサイザーの音色を選択していた(図6①)が、【3つの問い】②を基に試行錯誤している過程で音素材から得た「海でくつろいでい

る」というイメージに合う音色の選択を試みた(図6⑥)様子うかがえる。図6⑤や⑦にあるような、テクスチャや強弱の変化は、第3時に、音素材を効果音のように重ねていた友達の音楽作品から発想を得たと発言している。

以上のことから、生徒Bは、【3つの問い】を活用することで、知識を構造化、高度化しその知識を創作の活動の様々な場面で活用することができたと考える。【3つの問い】は、生徒Bの知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったと言える。

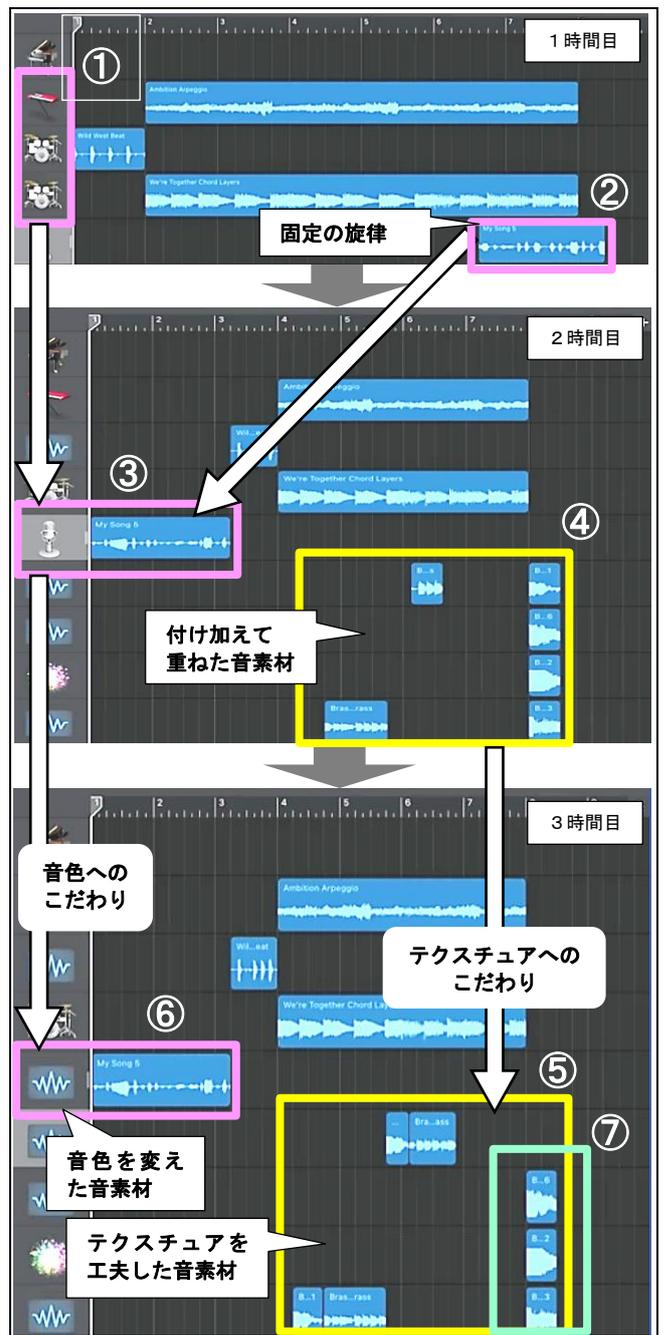


図6 生徒Bの音楽作品の変容

(3) 生徒Cの音楽作品の変容を中心とした分析

生徒Cの音楽作品を図7に示す。生徒Cは、音楽科の授業に意欲的に参加し、他者と協働して授業に取り組むことができる生徒である。

生徒Cは、第1時終了時には、花火を音楽で表現するために、花火の打ち上げ音に似た音素材を選んで重ねていた。その後、友達と一緒に、【3つの問い】③他にどんな工夫ができるのだろうか?と考えているうちに、花火の音には、クレシェンドとデクレシェンドが繰り返されているような強弱が付いていることに気付いた、と発言している。その気付きを活かし、第3時には花火の打ち上げ音に似た音素材を逆再生させ、クレシェンドとデクレシェンドのように組み合わせることで、花火が何度も上がる夏の夜空を表現しようとしていた。また、音楽の終わり方についてこだわっていた友達の音楽から発想を得て、だんだん音が消えるような終わり方したいと考え、シンバルの音を加えたり音素材の長さや重ね方を変えたりすることで強弱を変化させるなど、試行錯誤していた。生徒Cの発言や音楽作品からは、友達と協働する中で生まれた発想によって、思いや意図が深まったり新たなものになったりする様子がうかがえた。

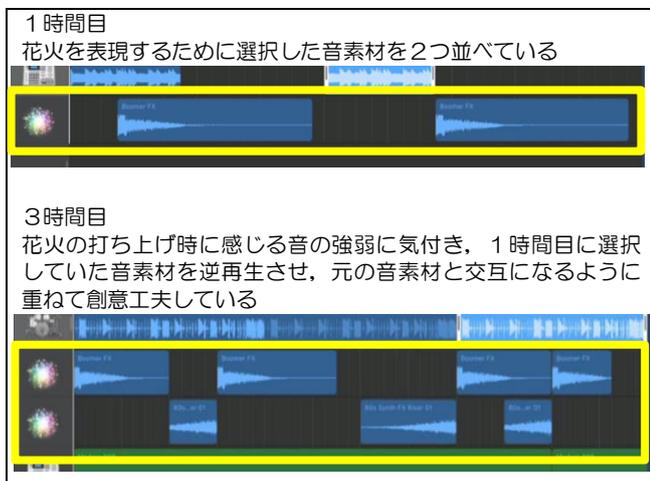


図7 生徒Cの音楽作品

生徒Cは、【3つの問い】を活用することで、イメージを膨らませていったり、イメージに合った音素材を選択したり組み合わせたりすることを繰り返すことができた。また、友達と協働する場面で【3つの問い】を活用することで、さらに創意工夫を重ねて自分なりのこだわりをもつことができた。

生徒Cの音楽作品の変容を中心とした分析から、生徒Cが【3つの問い】を活用することで、知覚・

感受、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら構造化、高度化し、作品をつくるために思考、判断する場面で構造化、高度化した知識を活用している様子がうかがえる。【3つの問い】は、生徒Cの知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったと言える。

(4) 生徒D, E, Fの振り返りシートの変容による分析

振り返りシートに記述した、自身の音楽作品の「こだわりポイント」について、生徒D, E, Fの記述を表3に示す。

表3を見ると、生徒D, E, Fともに授業ごとに記述量が増えていることが分かる。これは、自分なりのこだわりが徐々に明確になったことを示していると考えられる。また、生徒D, E, Fは全3時間の題材の中で、自分の表現したいイメージと音楽とを関連付けて創意工夫をすることができた生徒である。生徒Dは、支援を要する生徒であり、他者と協働することが難しい。そのため、教師から【3つの問い①②】を提示することとした。その結果、生徒Dは、「海で風が吹いている感じ」を表すために、軽やかなギターの音色を選択し、テンポを速くするなど、自己のイメージと関わらせながら創作表現にこだわりをもつことができた。生徒E, Fは、普段から音楽科の授業に意欲的に取り組んでいる。特に生徒Fは、意欲が高く、個別の取組の中でも理解を深めていくことができる。生徒Eは、他者と協働する場面で理解が深まっていくことが多い。生徒E, Fどちらの「こだわりポイント」も授業を重ねるごとに詳細になっている。これは、第2時、第3時に他者と協働する場面を多く設定していたため、【3つの問い】を活用しやすかったことでこだわりをより明確にしていくことができたからだと考える。また、生徒E, Fともに、個人思考の場面においても【3つの問い】を活用し、創作表現を創意工夫することができていた。これは、友達と協働する場面で【3つの問い】を活用した経験が、個人思考の場面において生かされたためだと考える。

生徒D, E, Fともに、【3つの問い】を活用することで、知覚・感受、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら構造化、高度化し、作品をつくるために思考、判断する場面で構造化、高度化した知識を活用している様子がうかがえる。以上のことから、【3つの問い】は、教師か

ら生徒に示したり、生徒同士のやりとりで活用したりすることで、創意工夫を促し、生徒が自分なりのこだわりを見つけることができることが分かった。【3つの問い】は、生徒D、E、Fの知覚・感受、イメージ、思いや意図などを、関連付けたり比較したりすることに有効であったと言える。

表3 「こだわりポイント」について、生徒D、E、Fの記述

(波線：音色，太線：速度，波線：テクスチャ，その他の要素：点線，網掛け：生徒のイメージを表す)

	1時間目	2時間目	3時間目
生徒D	無記入	海で風が吹いている感じを速いテンポとギターで表現した。	『夏休み』 楽しんでるところをドラムで、みんなで遊んでいる感じをカーニバルみたいな打楽器の音を重ねて表現した。この打楽器の音は暑さも感じるようになっている。
生徒E	夏の夜の涼しさを表現するためにテンポを100にして遅くした。	涼しさを感じる音楽を目立たせるために、それ以外の音を小さくして強弱のバランスをとった。固定の旋律を細かくして所々に重ねることで遠くから心地よく聴こえるメロディみたいな感じにした。	『波の上に乗って』 テンポを速くして涼しさや爽やかさを強く感じられるようにした。固定の旋律をリスの鳴き声に変えて音を高くすることで明るくしたことで、強弱を強くしたことでより「夏」を感じられる音楽にした。
生徒F	綺麗な海でイルカが泳いでいる光景を想像して、イルカの鳴き声のような音素材を重ねた。	固定の旋律の音色をピアノに変えることで穏やかな雰囲気にした。そこにイルカ以外の鳴き声も少し足して、海の中を表現した。最後にキラキラした音を重ねることで美しさが増して、人魚が踊っている光景を表現した。	『海の中で踊る人魚と仲間たち』 海の中の綺麗さと楽しさを表現した音楽。ピアノのメロディの強弱を強くして目立たせることで華やかさを出した。最初はシンプルにしてだんだん音を重ねることで、だんだん盛り上がっていく様子を表現している。全体的にゆっくりした速度にすることで優雅に泳ぐ海の生き物を表現した。

(5) 生徒全体の音楽作品の変容による分析

表4は、生徒の音楽作品に見られる、創意工夫の

変容を示したものである。音色，速度，テクスチャそれぞれの創意工夫の変容について、振り返りシート等の記述を踏まえて割合で示している。表4から、全ての生徒の音楽作品が変容したことが分かる。しかし、速度に関しては56.9%の生徒が変容させなかった(こだわらなかった)ことが分かった。これは、GarageBandの操作性にも起因すると考えられる。音色やテクスチャについては直感的な操作で変化させることができるGarageBandであるが、速度を変化させるためには、何度かアイコンをタップし、意図的に操作する必要がある。また、振り返りシートには、「速いリズムの音を重ねて、スピード感を出した」と記述する生徒もおり、リズムから感じ取れるスピード感と速度の違いがあまり認識できていない生徒がいることも示唆された。また、授業中に生徒から速度に関する発言が見られなかった1学級では、音楽作品に速度の変容が見られた生徒はわずか3人だった。

以上のことから、GarageBandを教材とする創作の授業では、【3つの問い】は、音色やテクスチャに着目し、手続き的知識(思考スキル)を働かせることには有効であったと概ね言える反面、速度に着目させたい場面では、用語や操作についての確認や、生徒や学級の実態に応じた補足説明等をする必要があることが分かった。

表4 創意工夫の変容 (n=86)

音楽を形づくっている要素	音楽作品が変容し、さらに創意工夫についての記述が見られた生徒	音楽作品に変容が見られた生徒	音楽作品に変容が見られなかった生徒
音色	61.6%	38.4%	0%
速度	14.0%	29.0%	57.0%
テクスチャ	66.3%	33.7%	0%

2 【3つの問い】は創意工夫の過程において生徒が活用できる問いであったか

授業実施後に本学園の生徒(第3学年)に実施した【3つの問い】の活用についてのアンケート結果を図8に示す。

4月当初に行ったアンケート(図1)では、自分なりのこだわりをもって音楽づくりに取り組んでいると答えた生徒は44.4%だったが、研究授業では【3つの問い】を活用することで、自分なりのこだ

わりをもって音楽をつくることができた」と93.3%の生徒が答えている。また、アンケートの自由記述欄には、【3つの問い】を活用することで、「音楽づくりへの意欲が高まった」「音楽の変化を感じることができて、具体的に工夫しやすかった」「イメージを広げやすかった」「悩んだときに考えるヒントになった」等の記述が見られた。

【3つの問い】を活用することで知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図を関連付けることについては、90%以上の生徒が、肯定的に回答している。思いや意図と知覚・感受したこと、イメージを関連付けながら創作に取り組んだことがわかる。自由記述欄にも「何度も試して自分のイメージを表現していった」「【3つの問い】を使って友達の音楽と聴き比べると、新しい意見や考えが生まれ、自分の音楽に取り入れることができた」という記述や、自分の中で音楽が完成したと思っていたが、友達の音楽を聴いて新たなイメージが生まれたり、友達から「音色を変えるとイメージが変わった」と言われたりしたことで、更に自分の音楽に工夫を重ねて良い曲をつくることができたという記述もあった。

【3つの問い】を活用することで関連付けたり比較したりするなどしながら、音楽づくりに取り組むことができたと答えた生徒は91.9%だった。【3つの問い】を活用することで生徒の音楽的な見方・考え方が働き、手続き的知識（思考スキル）を使うことができたため、知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりすることができたと考える。

以上のことから、【3つの問い】は創意工夫の過程において生徒が活用できる問いであったと考えることができる。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

創意工夫の過程にこだわりをもつための【3つの問い】を設定し活用することは、生徒にこだわりをもたせることに有効であることが分かった。生徒は、【3つの問い】を活用することで音楽的な見方・考え方を働かせ、手続き的知識（思考スキル）を使って知覚・感受したこと、イメージ、思いや意図などを関連付けたり比較したりしながら、構造化、高度化を繰り返すことができることが分かった。こだわりをもつための【3つの問い】の活用は、創作分野における深い学びに向かうことに有効であったと考える。

2 研究の課題

検証授業を通して、こだわりをもつための【3つの問い】が深い学びの実現に有効であることは分かったが、速度に着目させることについては不十分であることも分かった。創作の活動の教材としてICTツールを用いる場合は、それぞれのアプリケーションの特色を教師が丁寧に把握し、題材の目標に迫りやすいツールを選択する必要がある。また、検証授業における振り返りシートやアンケート等の提出を全てロイロノートで行ったところ、1週間の検証授業実施期間では、全員の提出を実現することができなかった。生徒の評価にICTツールを用いる場合、振り返りシート等を提出しなかった生徒が授業の内容に難しさを感じたために未提出なのか、操作に難しさを感じたために未提出なのか、提出の有無のみで把握することはできなかった。ICTツールを用いた記述等の集約は、即時性もあり大変有用ではあるが、より妥当性のある評価としていくために、授業観察や聴き取りなどの方法と並行し、評価

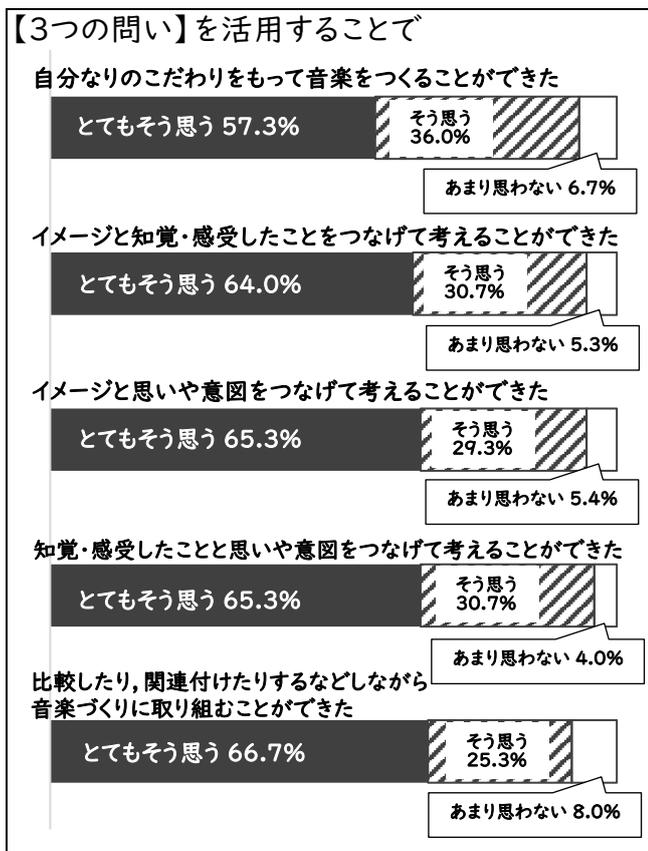


図8 【3つの問い】の活用についてのアンケート結果 (n=75)

を補う必要があると考える。

3 所属校との今後のつながり

本学園の研究上の課題として、深い学びを実現する授業に難しさを感じている教師がいることが挙げられる。生徒を深い学びに向わせるために各教科の学習指導のどの部分を改善すればよいか、各自が手探りで考えており、個々の教師の力量によって実施する内容に差が出ている。そこで、本研究の成果と課題を踏まえて、総合的な学習の時間における問いの活用について提案し、総合的な学習の時間を中心に、学園全体で深い学びを実現させたい。

【注】

- (1) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社p. 49を参照されたい。
- (2) 詳しくは、中央教育審議会（平成28年）：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』p. 50を参照されたい。
- (3) 詳しくは、田村学（2018）：『深い学び』東洋館出版社p. 64を参照されたい。
- (4) 詳しくは、植阪友理（2021）：『「問う力」を育てる理論と実践—問い・質問・発問の活用の仕方を探る（小山義徳・道田泰司編）』ひつじ書房pp. 205-206を参照されたい。
- (5) 詳しくは、植阪友理（2021）：前掲書pp. 205-206を参照されたい。
- (6) 詳しくは、中央教育審議会（平成28年）：前掲書p. 50を参照されたい。
- (7) 詳しくは、中央教育審議会（平成28年）：前掲書p. 50を参照されたい。
- (8) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書pp. 36-37を参照されたい。
- (9) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書pp. 36-37を参照されたい。
- (10) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書p. 57及び田村学（2021）：『学習評価』p. 39を参考に稿者作成。
- (11) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書pp. 72-77を参考に稿者作成。
- (12) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：前掲書p. 49を参照されたい。
- (13) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：前掲書p. 49を参照されたい。
- (14) 詳しくは、白井学（平成元年）：『中等教育資料』学

事出版社令和元年11月号pp. 27-29を参照されたい。

- (15) 詳しくは、植阪友理（2021）：前掲書pp. 205-206を参照されたい。
- (16) 詳しくは、植阪友理（2021）：前掲書pp. 205-206を参照されたい。
- (17) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書pp. 92-101, 110-117を参照されたい。
- (18) 詳しくは、田村学（2018）：前掲書pp. 92-101, 110-117を参照されたい。
- (19) 詳しくは、明鏡国語辞典を参照されたい。
- (20) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』東洋館出版社p. 74を参照されたい。
- (21) 詳しくは、文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社p. 49を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 田村学（2018）：『深い学び』東洋館出版社p. 56
- 2) 文部科学省（平成30年）：『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』教育芸術社p. 49
- 3) 文部科学省（平成30年）：前掲書p. 13
- 4) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 10
- 5) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 49
- 6) 文部科学省（平成30年）：前掲書 p. 49